

## カガミとメガネ

谷口知子

日本語には「カガミ」と「メガネ」という2つのことばがある。前者は光を反射し物体の画像を映す器具、後者は眼の前（鼻）に掛け視力の増進又は眼の保護に用いる器具である。ところで異なるこの2つの言葉は、漢字で表記すればそれぞれ「鏡」と「眼鏡」とあるように「鏡」という漢字が使用されている。口頭言語では区別されている対象物が、なぜ文字言語のレベルでは統一されたのだろうか。

### 1 カガミの語源

「カガミ」の語源については、

『日本古語大辞典・語誌』：「カガ（炫）ミ（見）・カゲ（影）ミ（見）」

『字訓』：「「影見」の意であろう。」

『大日本国語辞典』：「赫見（カガミ）の意。一説、影見の義。」

とある。この「赫」という字は「光、光る」、「炫」という字は「ひかる、てらす、ひかり」、「影」という字は「ひかり、像、すがた」の意味である。そこで、「カガミ」は「光・姿・像を見る」或は「照らして見る」という意味を持つと推測される。

また、「カガミ」という音について『日本古語大辞典・語誌』には、古語では「カタ（像）」ではなかったかという説、また「鑑」の「カム」の音から出た説、更に日本語と同一の源から出た契丹語（後魏の頃から中国東北部にいた種族の語）においてもカガミを「カガミ」又は類似の音で呼んだという3つの説がみられる。

恐らく「カガミ」という語は、中国と交流がある以前にすでに存在していた。

### 2 カガミと表記——外来の「鏡」、和語系の「加賀美」

日本に最初に伝来したカガミは朝鮮製のもので呪術道具であったという。それは弥生時代前期末のことで、弥生時代中期以降には前漢・魏の時代のカガミが伝来するようになった。中国の漢・魏の時代には、カガミは姿を映す器具であり、またそこから派生した道徳の模範

の意味を含み、更に魔よけの機能をもった器具であった。そこで日本のカガミも朝鮮や中国と同様に呪術道具、魔よけ、化粧道具、道德の模範という役割を担った器具として使用された。

カガミが文献資料に登場するのは奈良時代前期頃になってからである。『古事記』下（『日本思想大系 1』 p.261、岩波書店）に「……伊久比尔波 加賀美袁加気……阿賀母布伊毛 加賀美那須 阿賀母布都麻 阿理登伊波婆許曾尔……」（斎杵には 鏡を懸ケ……吾が思ふ妹鏡なす 吾が思ふ妻 有りト言はばゴソに……）という歌謡がある。「加賀美」ということばが記されていることから、カガミは「カガミ」という音で呼ばれたことがわかる。また、神事を行うときの玉や鏡のように大切な妻が健在ならばという内容から、カガミは神聖なものとして用いられている。

『万葉集』（『日本古典文学全集 5』小学館）に「……腰細丹 取錆氷 真十鏡 取双懸而 己蚊巢 還氷見乍……後之世之 堅鑑將為迹 老人矣 送為車 持還來（腰細に 取り飾らひまそ鏡 取り並め掛けて 己が顔 かへらい見つつ……後の世の 鑑にせむと 老人を送りし車 持ち帰りけり）」（歌 3791）、「……己妻尚乎 鏡登見津藻（己妻すらを 鏡と見つも）」（歌 3808）という歌がある。「真十鏡（まそかがみ）」「堅鑑（かがみ）」とあるように「鏡」、及び「鏡」と同義の「鑑」という字が宛てられている。

このように中国大陸から伝来した鏡を「カガミ」という大和ことばで呼んでいたことが分かる。古くから「カガミ」を含む複合語に「みずかがみ（水鏡）」「いしかがみ（石鏡）」「おおかがみ（大鏡）」「やたかがみ（八咫鏡）」「まそかがみ（真澄鏡）」などが多数存在していた。

### 3 メガネの伝来と表記

一方、メガネは 13 世紀の終りにイタリアで老眼のための凸レンズから始まった。近眼のための凹レンズは遅く 16 世紀の中頃以降発達したらしい。日本への伝来はイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルが 1551 年（天文 20 年）に周防の国主大内義隆に献上したのが最初であるといわれている。『大内義隆記』（『群書類従』合戦部、巻 394）に挙げられている贈り物の中に「老眼ノアザヤカニミユル鏡……」、いわゆる鼻掛け式の老眼鏡がある。しかしこの段階では「メガネ」ということばは使われていない。

「メガネ」という和語系のことばは「メ+ガネ（カネ）」で構成された単語であろうが、「メガネ」の語源については『異国日記』の中にヒントを得ることができる。同日記には日本に最初に伝来した望遠鏡（1613 年）が「遠目金」という文字で記されている。この「目金」は、「縁が金属製でできた目につける器具」という外形を形容してできたことばであると筆者は推測する。というのは、日本に伝来したメガネは輪（フレーム）にレンズを入れ、輪（フ

レーム) から柄を出し鼻に掛けるタイプであり、その輪 (フレーム) は鉄・金・銀などの金属でできていたからである。その後、日本では金属のフレームに紐がついた紐付きメガネが広く使用された。こうしたことから、「メガネ」は「目 (め) 金 (がね・かね)」から生まれたことばであると考えられはしないだろうか。

また、「メガネ」は江戸初期の長崎通事の日記や貿易品目の帳簿などに確認できる。例えば、『唐通事会所日録』1669年「鼻目かね」「めかね」。『異国往復書翰集』(1642年)「遠目かね」。『唐蠻貨物帳』「寶永六年阿蘭陀船4艘日本二而万買物仕積渡寄帳」(1709年)「数目鏡」、正徳元年(1711)唐船「虫めがね」「磯めがね」「遠めがね」。『万金産業袋』(1732年)「丸目鏡」「近目鏡」「虫目鏡」「遠目鏡」等々である。このように和語系の「メガネ」は各種メガネの名称以外に望遠鏡(「遠目かね」「遠めがね」)や顕微鏡(「虫めがね」)の類にも使用され、複合語の構成要素を担った。更に、江戸期の随筆や広告などに、「目金」「め金」「目鏡」「眼かね」「七つめがね」「目がかねや」「目がね」などのことばが見られ、民衆の間では「メガネ」と呼ぶことが一般的だったとみられる。

漢語系の「眼鏡」という文字が最初に認められる日本の書物は寺島良安 1713『倭漢三才圖会』巻26「服玩具」である。めがねの項に「眼鏡めがね」と記され、「近眼鏡」「遠眼鏡」「蟲眼鏡」「数眼鏡」が紹介されている。ここからも、文字表記では「眼鏡」だが、話ことばでは「メガネ」で呼ばれていたことがわかる。

#### 4 名付けの動機付け

カガミとメガネは光学器具という面で同類のものである。しかし、原理の面では前者が反射の原理を利用するのに対して、後者が光を透過させる方法を採用している。前者に反射性の特徴づけが可能であれば、後者は、透過性という特徴付けが可能となる。日本語の和語系語彙では、反射性のものを「カガミ」と呼び、透過性のものを「メガネ」と呼び分けている。このような呼び訳はまた、日本語だけではないようである。例えば、イタリア語では *specchio* と *occhiali*、ドイツ語では *spiegel* と *brille*、フランス語では *miroir* と *glace・lunettes* と *binocles*、英語では *mirror* と *glasses* のように。いずれも(全く?)別の人工生産物として認知されているのである。

一方、中国語ではカガミは「鏡 *jing*」(現代語では「鏡子」)、メガネは「眼鏡 *yanjing*」と呼び、両方とも「鏡」を使用している。つまりメガネもカガミの一種で、目のカガミなのである。

古典中国語では「鏡」の同義語に「監」「鑿」「鑑」などがある。古代中国人は水を張った容器の水面に光を反射させ、カガミとして使用したという。いわゆる「水鏡」である。このカガミは「監」と称された。周代中期、冶金工芸が進歩するにつれ、青銅製の器やカガミが

製造されるようになると、金偏を付けて「鑿」あるいは「鑑」という文字ができた。「鏡」は春秋戦国（前460-前370）の文献に認められ、例えば、墨子『墨経・非攻中第十八』に「君子不鏡於水、而鏡於人。鏡於水見面之容、鏡於人則知吉與凶」とあるように、「鏡」は姿を映す器具として用いられている。また『設文解字』には「鏡景也…」とある。この「景」という文字は「ひかり、けしき、光によってできるかげ」という意味であり、「鏡」という文字は、「光によってできる影・景色」を見る道具の意味を持つに至り、そして「鑑」を取って代わったのである。

このように、中国では光を反射させて、顔や景色を見る器具の名前として「鏡」が成立したが、その後、他の種類の光学器具も登場することになる。まず、宋代になると、「透光鑑」という光を透すカガミが現れる。宋・沈括『元刊夢溪筆談・卷十九』（p.9）に、「世有透光鑑鑑背有…以鑑承日光則背文及二十字皆透在屋壁上了了分明…」（世に透光鑑というものがある。…鑑で日光をうけると、背面の文様と銘文はすべて屋内壁面にくっきりと透けてうかびあがる。〔東洋文庫 362『夢溪筆談 2』の訳より〕）とある。さらに「眼鏡」も中国に伝来する。イエズス会士によって、telescope の知識と実物も中国に持ち込まれ、「遠鏡」あるいは「望遠鏡」と呼ばれた。他に「鏡」を使う熟語に「水鏡」「銅鏡」「明鏡」「千里鏡」「顕微鏡」などがある。つまり中国では、これらの光学器具は反射性、透過性による区別をせずに、すべて「鏡」の一族と見なされているのである。中国語と同じようにカガミとメガネを同一視する言語が他にあるかどうかは、筆者が寡聞にして知らない。

以上みてきたように、日本と中国とでは、光学器具という同類の対象物に対し、その特徴の捉え方が異なる。中国語は「光」に関係する風景だけを注目するようだが、日本語は「光」の利用法まで考慮に入れた感じがする。難しく言えば、反射性が透過性かという違いを名付けの動機に用いられた（あるいは用いられない）のである。客観的に同じものでも、言語が違えば、違うものとして見えてくる1例として実に興味深い。